

(肝属郡東串良町新川西地内)

位置と環境

唐仁古墳群は、町の南部にあり、大字新川西に位置している。「大塚砂嘴」と呼ばれる海拔5～7mの旧期砂丘南端部に立地しており、南側に塚崎古墳群（高山町）北側に横瀬古墳（大崎町）を望むことができる。昭和9年に「史跡名勝天然記念物」として、当時132基の古墳が国指定史跡となった。その後、追加指定を受け、現在は140基が国の指定を受けている。

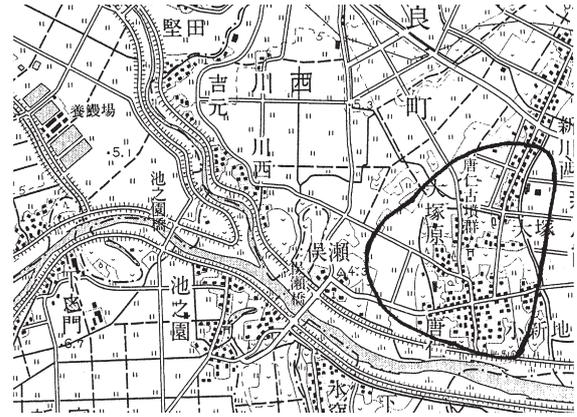
調査の経緯

県営低コスト化水田農業大区画圃場整備事業は、事業計画部分が唐仁古墳群域の一部を含むために分布調査を実施した。その結果、広範囲において遺物散布地であることが判明した。町教育委員会が調査主体となり県教育委員会の協力を得て、平成5年から7年の3か年計画で実施した。なお、確認調査は、古墳周辺の水田及び畑地のみで実施した。これまでの調査は資料によると、昭和7年に1号墳（大塚古墳）の石室及び石棺等について学術調査がなされている。

遺物と遺構

平成5年度の調査は、調査区の南部を中心に確認調査を計画した。調査区内には2基の古墳が存在しているために、古墳の周溝と削平を受けた墳丘の確認を中心に行った。その結果、33号墳周辺でのトレンチから遺構が検出され、遺物の出土はなかったが、33号墳の周溝ではないかと思われる遺構を検出した（第2図）。

平成6年度の調査は、調査区の中央部を中心に確認調査を計画した。この調査区には4基の古墳が存



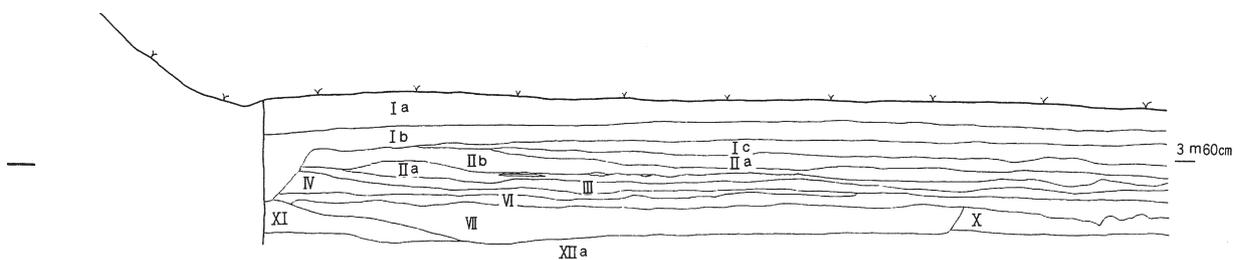
第1図 唐仁古墳群の位置

在しているために、それぞれの古墳周辺の状況把握のため確認調査を実施した。その結果、どの古墳も遺構を確認することが出来なかった。しかし、この調査区からは、弥生時代と思われる土器が多数出土している。第3図の土器は、口縁部径40.5cm、器高46.2cmを測る壺型土器で、口縁部は大きく外反し、口唇部はややくぼみを持つ。そのくぼみ部分に竹管状の工具による刺突文が見られる。頸部は肩部との境でしまる形状で、胴部には2本の貼付突帯が施されている。外面調整はハケ状工具による調整で、内面はケズリの調整を施している。年代としては山ノ口式土器よりもやや古いと思われる。

平成7年度の調査は、調査区北側と南西部の「堀込城跡」を対象に確認調査を計画した。

この調査区には6基の古墳があり、周辺状況の把握に努めたが周溝などの確認はできなかった。

遺物は、弥生・古墳時代の土器片が多数出土した。弥生時代の土器は、壺型土器口縁部から頸部へかけてのもので、口縁部が頸部から立ちあがりながら大きく外反している。口縁部は、二叉口縁をもつもので口唇部の中央部はくぼんでいる。上部の方は陵を持っており、頸部は中央部がややしまる形態であり、



第2図 33号墳東側トレンチ北側面

肩部には4条の断面三角突帯が巡らされている。弥生時代中期の遺物と思われる(第5図)。古墳時代の土器は壺型土器で、復元口径14.5cm、器高35.6cmを測る。頸部に一条の絡縄突帯を巡している。底部は丸底で、調整は不鮮明ではっきりしない(第4図)。

なお、確認調査では、5・6・7年度にかけて、地下レーダー探査を導入している。古墳の周辺を集中して遺構の検出に努めたが、周溝と確認される遺構は検出できなかった。しかし、池田湖噴出の軽石層やその下の砂層の起伏の状態を確認することが出来た。また、33号墳の中心を南北にレーダー探査し

たところ、墳頂付近の地下に石室らしい痕跡の反応が検出されている。

特徴

本遺跡は、唐仁古墳群域の西側縁辺部にあたるため、遺構・遺物の検出が少なく、唐仁古墳群の性格を把握するまでには至らなかったが、弥生時代の遺物が出土していることから、少なくとも古墳時代以前よりこの地を人々が活用していたことが明確になった。

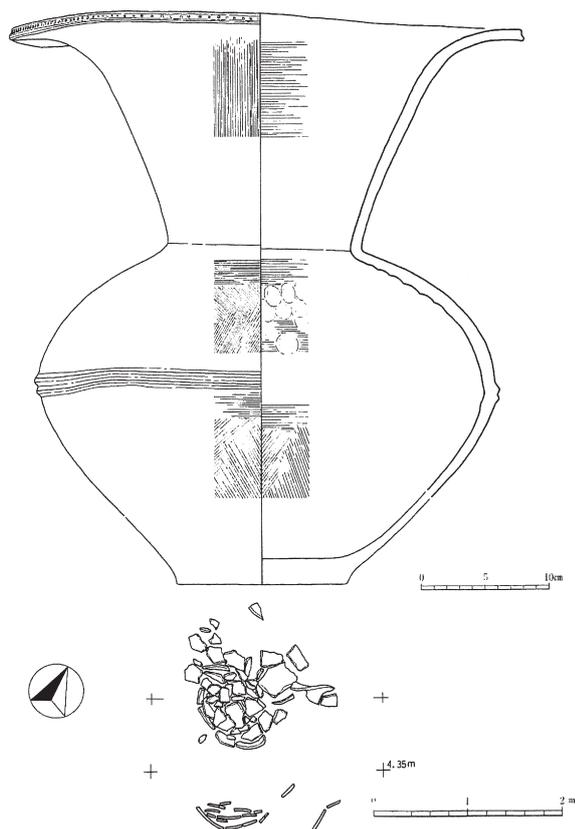
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

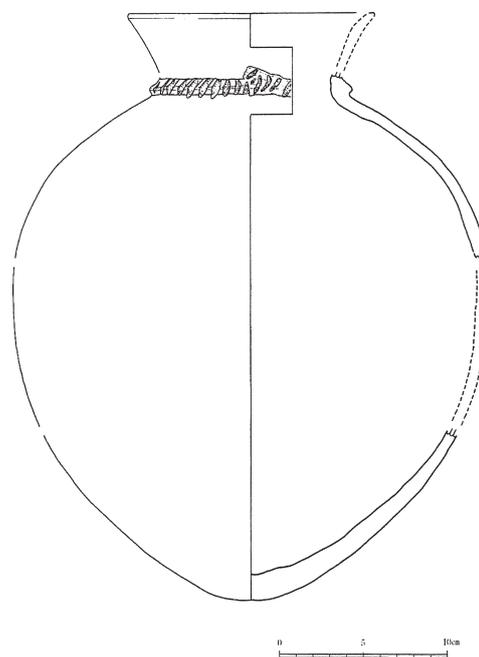
参考文献

東串良町教育委員会1996「唐仁古墳群2 堀込城跡」『東串良町埋蔵文化財発掘調査報告書』5

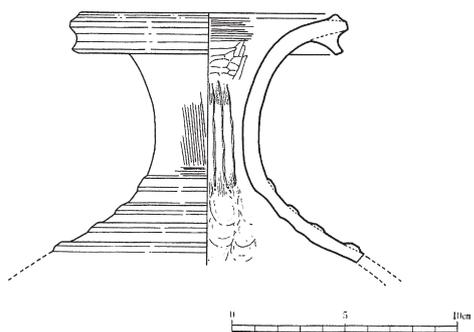
(吉留潤一郎)



第3図 出土遺物及び出土状況



第4図 出土遺物



第5図 出土遺物及び出土状況

